ヨハネ第一2章12－14節 「キリスト者の成熟」

**1A キリスト者の成長の三段階**

**2A 三つの呼び名**

1B 子ども、幼子たち

2B 若者たち ― 悪い者への勝利

3B 父たち

*1C 初めにおられる方*

*2C 家族の元*

*3C 完全な者*

1D 練られた品性

2D 寛容な心 マタイ6

3D 他者の益 1コリ 4:15

**本文**

みなさん、こんにちは。久しぶりのみなさんとの出会い、とてもうれしいです。今日は父の日です。そこで、キリスト者が「父たちよ」と呼ばれているところを、取り上げたいと思います。「成熟」したキリスト者について考えてみたいと思います。お父さんに限らず、霊的に成熟した人を、ヨハネは第一の手紙で「父たちよ」と呼んでいます。

キリスト者として、「霊的成長」については多くを聞いてこられたと思います。けれども、人間が成長して十分に大人として成熟するように、霊的にも成熟に向かうことを、聖書は多く語っています。信仰生活が長くなっていくと、自分の霊的な目標を、どこに設ければよいのかを思い巡らす人々は多いのではないでしょうか？信仰が成長して、成熟に向かうということについて、じっくりと見ていきたいです。

ヨハネによる手紙第一 2 章 12 節から 14 節からです。ヨハネ第一 2 章 12-14 節です。「[12] 子どもたち。私があなたがたに書いているのは、イエスの名によって、あなたがたの罪が赦されたからです。[13] 父たち。私があなたがたに書いているのは、初めからおられる方を、あなたがたが知るようになったからです。若者たち。私があなたがたに書いているのは、あなたがたが悪い者に打ち勝ったからです。[14] 幼子たち。私があなたがたに書いてきたのは、あなたがたが御父を知るようになったからです。父たち。私があなたがたに書いてきたのは、初めからおられる方を、あなたがたが知るようになったからです。若者たち。私があなたがたに書いてきたのは、あなたがたが強い者であり、あなたがたのうちに神のことばがとどまり、悪い者に打ち勝ったからです。」

ここには、主に三つのグループの人々に対する呼びかけがあります。子どもたち、あるいは幼子たち。これが一つ目。次に、若者たち。これが二つ目です。そして、三つ目が父たちです。ヨハネのこの第一の手紙には、これを読んでいる人々への深い愛情が込められています。ヨハネが最長老ともいえるべき歳を取っている人ですし、イエス様と共に三年以上過ごして、主が復活してから既に 60 年、その信仰の歩みを果たしてきました。その中で、教会にいる人たちを、我が子のように愛みなしていました。何度となく、彼は「愛する者たち」と彼らのことを手紙の中で呼んでいます。

そこで、霊的な段階として、子供たちがいます。次に、若者たちがいます。それから、父たちがいるのです。霊的に成長する時に、信じたばかりの時に最も必要なことが、子供たち。そして次に信仰の歩みとして、若者たちがいます。そして、信仰が成熟している人々は、父としての務めが与えられています。

**1A キリスト者の成長の三段階**

ところで、ある人がこんなことを言っていました。キリスト者として、霊的にどのように成長するのか？と。信じたばかりの時は、「自分のこと」に集中しています。自分がイエス様にきちんと従えているのかどうか、心が大きく変化したのですから、新しい歩みにどのように適応させていけばよいのかで精一杯なところがあります。けれども、次に「神のこと」に集中します。聖書を読んでいく中で、神のこと、イエス様のことが、どんどんすごい！と思うようになっていきます。初めはクリスチャンとしての自意識が強かったのですが、そういったことは横に置いておいて、聖書についてのこと、神のこと、キリストのことで夢中です。これはすばらしいことですね。けれども、そのようにして神を信じる信仰が強められて、次に「隣人」に向きます。以下に、キリストにある者としてキリストの愛を他者に伝えていくのか、人々に目が向きます。まずは、自分、次に神、それからキリストにある自分を通しての、隣人です。この説明は、ここのヨハネの、子供たち、若者たち、それから父たちに似ているかもしれません。

牧者チャック・スミスが、「愛」という本を書きました"Love – More Excellent Way"。その本の構成も同じになっています。第一部が、どのようにして神が私たちを愛してくださったのか？ということです。自分がいかに愛されているかを知ることが先です。第二部が、どのように自分が神を愛するのか？ということです。愛されている自分が、全き心で主を愛することです。それから第三部が、いかに自分を通して、隣人を神の愛で愛するのか？ということです。自分から始まり、次に神、そして周囲の人です。成熟したキリスト者は、隣人、自分以外の兄弟に向かっている人であります。

**2A 三つの呼び名**

1B 子ども、幼子たち

では、第一段階の「子どもたち」を見てみましょう。「[12] 子どもたち。私があなたがたに書いているのは、イエスの名によって、あなたがたの罪が赦されたからです。」とあります。子どもというのは、神によって生まれた人、御霊によって生まれた人のことを言いますね。この人たちの初めの必要は、「罪が赦された」ということを知ることです。あなたがたの罪が赦されました。それはイエスがご自身の血を流してださり、その罪を神が清めてくださったということです。このことを彼らに知ってほしい、何にもまして、何よりも初めに、イエスの名によって罪が赦されていることを知ってほしいと願いました。

というのは、信仰を持って間もなくの人たちは、これまで犯した罪の重さから、自分の罪が赦されたということの確信がたやすく揺らいでしまうからです。キリスト者になったのだから、自分は善い行いをしなければいけなのに、できていない。罪を犯してはいけないのに、また犯してしまった。もう赦されないのではないか？救われていないのではないか？と疑ってしまいます。そこに悪い者、サタンが付け込んで、罪責感を抱かせて責めるのです。それでヨハネは、第一の手紙の中でじっくりと取り組んでいます。「2:1-2 私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。しかし、もしだれかが罪を犯したなら、私たちには、御父の前でとりなしてくださる方、義なるイエス・キリストがおられます。この方こそ、私たちの罪のための、いや、私たちの罪だけでなく、世全体の罪のための宥めのささげ物です。」

罪の赦しは、人間にとって死活的なものです。神の前に立てないという問題があるし、また、罪意識を背負って生きることの重さは過酷です。イエス様は、中風の人に向かって、まず、「子よ、あなたの罪は赦された。」と言われました（マルコ 2:5）。ペテロは、聖霊が降ってから初めての説教で、罪示されたユダヤ人たちに、こう言いました。「使 2:38 そこで、ペテロは彼らに言った。「それぞれ罪を赦していただくために、悔い改めて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。」まず、罪の赦しが必要です。

すべては、この恵みから始まるのです。不道徳な女について、パリサイ人のシモンにこう言われました。「ルカ 7:47 ですから、わたしはあなたに言います。この人は多くの罪を赦されています。彼女は多く愛したのですから。赦されることの少ない者は、愛することも少ないのです。」彼女がイエス様を愛する行いに出られているのは、多く赦されたからです。キリスト者のすべての原動力は、神にいかに愛されたか、赦されたかにかかっています。ここから、霊的成長が始まります。ペテロ第二の最後に、「私たちの主であり、救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。（3:18）」とあります。神の恵みによって、初めて成長できます。

2B 若者たち ― 悪い者への勝利

そして、若者については、「あなたがたが悪い者に打ち勝ったからです。」ということです。若者に

は若者の弱さがあり、その葛藤の中で生きていて、打ち勝つこと、克服することが課題となっています。霊的には、罪との戦いです。自分は悪魔に敗北しているのか？そう思ってしまう自分がいます。しかし、ヨハネは励ましているのです。罪の中にいた時は、悪魔の言いなりになっていたけれども、キリストによって贖われた今、悪い者に打ち勝っているのだということです。第一の手紙でこれから、ヨハネは悪い者があなたがたを支配することはない、勝利していることを何度となく語っていきます。「4:4 子どもたち。あなたがたは神から出た者であり、彼らに勝ちました。あなたがたのうちにおられる方は、この世にいる者よりも偉大だからです。」「5:4-5 神から生まれた者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。」

このようにして、罪の赦しを得た者が、次に自分が信仰によって、世に打ち勝っているということを知ることが、次の霊的前進に飛躍的に進みます。肉に従う生活ではなく、御霊に従う生活です。自分の罪に対しては死んでおり、キリストとともに墓の中からよみがえった、その新しいいのちを得ており、御霊に導かれて肉の欲望を満たさないという生活です。

3B 父たち

そして、父たちという呼びかけです。「[13] 父たち。私があなたがたに書いているのは、初めからおられる方を、あなたがたが知るようになったからです。」ここからが、キリスト者の成熟という内容に入っていきます。

*1C 初めにおられる方*

「父たち」という呼びかけです。パウロは、テモテに対して、「信仰による、真のわが子テモテへ。」と呼んでいます（Ⅰテモ 1:2）。自分が信仰による父だと思っているのです。パウロがコリントの人々に対して父のような存在でした。「Ⅰコリ 4:15 たとえあなたがたにキリストにある養育係が一万人いても、父親が大勢いるわけではありません。この私が、福音により、キリスト・イエスにあって、あなたがたを生んだのです。」と言いました。つまり、自分自身は十分に成長し、成熟しており、人を信仰的に養い育てるような働きをしている人々のことを言っています。

そういう人たちが必要な言葉が、「初めからおられる方を、あなたがたが知るようになった」ということです。初めからおられる方とは、手紙の冒頭にある言葉、「1:1 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、自分の目で見たもの、じっと見つめ、自分の手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて。」であります。もっと詳細に言うならば、福音書の冒頭の言葉があります。「1:1 初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」初めからおられた父なる神と、父を現してくださった御子キリストのことです。

*2C 家族の元*

父というのは、元にあるという意味合いがあるでしょう。「エペ 3:15 天と地にあるすべての家族

の、「家族」という呼び名の元である御父の前に祈ります。」父は家を養い、家を守り、家を導きます。家においては、すべての前にいて、初めにいなければいけません。世の中で、しばしば「父の不在」という言葉がありますが、それは家のことについて、父が初めにいないことが問題なのです。家で起こっていることについて反応して、対応しようとしていますが、その時点で父としては失格です。家で起こっていることの始まりに自分がいなければならないのに、その責任を果たしていないからです。

ですから、人々の信仰を養い育て、守り、家を治めていく時に、父たちが最も必要としているのは、自分自身の父です。その父が、初めからおられた方、つまり神であられ、そして御子キリストが、父なる神を完全に表してくださったということです。父にとって必要なのは、神の御前に自分自身が出て行って、自分の必要、自分の知恵、自分の力、自分の決断、すべてを神によって満たしていただくことです。神の前に行って、涙して、砕かれる勇気をもった男が、真の男であり、父になることができます。ダビデが、死ぬ間際にソロモンに対して、「Ⅰ列王 2:2 あなたは強く、男らしくありなさい。」と言いました。そして、コリントの教会にも、「Ⅰコリ 16:13 目を覚ましていなさい。堅く信仰に立ちなさい。雄々しく、強くありなさい。」と言いました。

*3C 完全な者*

そこで、霊的に父となっていくとき、つまり、成熟に向かう時に必要なことは、経験です。経験の中でも試練や苦しみが成熟をもたらします。キリストご自身が苦しみによって、救いを全うされました。私たちも、苦しみをもって、自分のうちにキリストが形造られます。主によって与えられた試練を、信仰を働かせて忍耐する時に、その人は、十分に整えられた者になります。聖書では、「全き者」という言葉で言い表しています。

1D 練られた品性

ヤコブ 1 章を開いて見てください。2-4 節です。「2 私の兄弟たち。様々な試練にあうときはいつでも、この上もない喜びと思いなさい。3 あなたがたが知っているとおり、信仰が試されると忍耐が生まれます。4 その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは何一つ欠けたところのない、成熟した、完全な者となります。」ここに、成熟への道が書かれていますね。霊的な大人になるには、様々な試練に、正しく応答するということですね。試練があるからこそ、信仰をフルに働かせる機会があるということで、喜びとみなしなさいということです。そして、信仰を働かせる時には、忍耐が生まれます。その忍耐を十分に働かせる時に、成熟へと向かいます。要は、成熟した人は、自分の信じていることが、その試練や苦しみによって深められ、体験している人です。単に、神を信じていると言っている人ではなく、体得している人です。

同じように、パウロがロマ 5 章で、苦しみこそが人を真の希望へと至らせることを話しています。「3 それだけではなく、苦難さえも喜んでいます。それは、苦難が忍耐を生み出し、4 忍耐が練ら

れた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと、私たちは知っているからです。」ヤコブ書と同じように、苦しみは忍耐を生みだします、それから練られた品性を生み出します。そして希望を生み出すのですが、私たちは、神のみに希望を抱いているのか？というと、違うところにいつの間にか抱いていることがあります。苦難がそれを取り除く機会を与えます。そして、ただ神にのみに望みを置いている人が、十分に整えられた者、成熟した人と言えるでしょう。

そうして、苦しみを経ると、神はその苦しみと共に慰めを与えられます。そして慰めを受けた人々は、同じように苦しみに遭っている人々を慰めることができます。そのことが、コリント人への手紙第二の挨拶のところに書いてあります。「Ⅱコリ 1:4 神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます。それで私たちも、自分たちが神から受ける慰めによって、あらゆる苦しみの中にある人たちを慰めることができます。」人々への慰めの働きをすることができます。隣人への憐れみ、愛を効果的に示すことができます。このように、苦しみや試練を経て、正しく応答している人は、成熟した人になっていきます。

2D 寛容な心 マタイ6

私たちは、とかく「完全な人」であるとか、「成熟な人」というと、何か間違いを犯さない、完璧な人という意味合いで受け取ってしまうかもしれません。いいえ、違います。イエス様が、「完全になりなさい。」と言われた時、何をもって言われたのかを見てみましょう。マタイ 5 章 28 節でイエス様は、「あなたがたの天の父が完全であるように、完全でありなさい。」と言われています。そんなのむりだ、神が完全であるように、完全でありなさいなんてできっこない、と思われるでしょう。そういった時に前提にこんなこと考えていませんか？「神は何も過ちを犯されなかったように、自分も何も過ちや罪を犯さないでいなさい。」という意味合い、つまり完璧な人というように、考えてしまっていないでしょうか？

その前に何をイエス様が言われたのか？敵を愛して、迫害する者のために祈りなさいと命じられました。その根拠をこう言われたのです。「マタ 5:45 天におられるあなたがたの父の子どもになるためです。父はご自分の太陽を悪人にも善人にも昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからです。」正しい者だけでなく、正しくない者たちにも等しく雨を降らせました。完全な人というのは、このように寛容な人、罪人を耐え忍ぶ人、憐れむ人なのです。罪には妥協せず、しかし、人々を公平に接していくことのできる人が、完全な人ということです。

3D 他者の益 1コリ 4:15

そこで、パウロがコリントの人たちに言った言葉を、もう一度読んでみます。「Ⅰコリ 4:15 たとえあなたがたにキリストにある養育係が一万人いても、父親が大勢いるわけではありません。この私が、福音により、キリスト・イエスにあって、あなたがたを生んだのです。」コリントの教会には、パウロがいなくなった後に、偽使徒たちが入っていきました。そして、自分たちにフォロアーを集め

るために、パウロの評判を落としていきました。そういった者たちをパウロは、「養育係」とここで言っています。自分の利益のために養おうとしているだけです。しかし、パウロは、父のようにして彼らに接していたのです。彼の働きにとって、コリントの人々はイエス様を信じていきました。このようにして、父のようにして彼らのことを自分の子どのように見ていたのです。コリントの人たちの益になることを一心に考えていたのが、パウロです。自分のことは、どうでもよかったのです。他者の益を求める、これも父の姿です。

私たちが、このように成熟を目指すことは、そのまま父なる神を知ることを意味します。私たちはいつも、祈りの中で「天にいます父なる神さま」と祈ります。この方を知っていく喜びに、これからも味わっていきましょう。